



2019 年度

国際社会実習報告書

台湾／中芸



2019年度
国際社会実習報告書



国際社会実習報告書

2019年度

【Contents】

発刊にあたって	01
国際社会実習（外国語実習）	02
2019年度 台湾・開南大学夏期中国語／英語・台湾文化研修への参加 開南大学夏期研修を終えて 国際社会実習に参加して 台湾での2週間を振り返って 2019年度開南大学夏季 中国語／英語・台湾文化研修中国語中級クラスに参加して 台湾という地で	
国際社会実習（国内調査実習）	18
2019年度 高知県・中芸地域における国際社会実習について ユーモアあふれる元気澁刺なおばあちゃん — Mさんのライフヒストリー —	

発刊にあたって

高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コースで2019年度に開講された「国際社会実習」の報告書をお届けします。本報告書には、各実習の担当教員による活動概要や総括と参加学生によるレポート・報告が掲載されています。実習担当教員の思いや参加した学生がそこで得たものが詰まっていますので、ぜひ読んでみてください。そして次の機会には、みなさん、ぜひ参加してください。

ここで、その「国際社会実習」の授業について簡単に説明しておきます。「国際社会実習」は、実習内容や実習先、さらにレベルに応じて、以下の5つに整理されます。

- ① スタディ・ツアー ② 外国語実習 ③ 国内調査実習
- ④ 海外調査実習 ⑤ フィールド・リサーチ

同じ実習先でおこなわれる授業でも、参加した学生の研究テーマやレベルに応じて、授業名が異なる場合もあります。また、国際社会コース開講の授業とはいえ、コースの枠、さらには学部の枠を越え全学に開かれた科目となっているので、他コース・他学部の学生も参加できます。

本報告書の対象となる2019年度には、二つの実習が実施されました。まず、台湾・開南大学でおこなわれた「外国語実習」。これは、開南大学主催の「2019年度開南大学中国語/英語・台湾文化研修」プログラムに参加するという形で実施されたもので、語学能力の向上とともに台湾の様々な文化を体験し、異文化理解を深めようとするものです。

次に高知県中芸地域でおこなわれた「国際社会実習(国内調査実習)Ⅱ」/「国際社会実習(スタディ・ツアー)Ⅰ」です。これは、2017年度からおこなわれていた調査実習の継続です。「森林鉄道から日本一のゆずロードへーゆずが香り彩る南国土佐・中芸地域の景観と食文化」として「日本遺産」に認定された地域の歴史に、住民個人が生きてきた個人の歴史を織り込んでいこうとするものです。フィールドとした北川村での住民へのインタビューとその再構成が実習の核となっています。

なお、2019年度はコロナの影響で開講を諦めざるを得なかった実習もあります。2月から3月にかけて予定されていた台湾高雄大学での外国語実習とオーストラリアで予定されていた海外調査実習の2科目です。事情が事情とはいえ、楽しみにしていた多くの学生の期待に応えることができず、大変残念なことでした。

最後になりましたが、本報告書の発行にあたっては人文社会科学部長裁量経費からの補助を受けています。また、個別の実習においても学内外から様々な形での支援、とりわけ、実習先の地域や大学においては、学生の受け入れ等で多大なサポートを受けています。改めて感謝の意を表します。

2021年2月

高知大学
人文社会科学部人文社会科学科 国際社会コース長
齋藤昌人

《外国語実習》

2019年度 台湾・開南大学夏期中国語／英語・台湾文化研修への参加

高知大学人文社会科学部人文科学コース 吉尾 寛

高知大学人文社会科学部国際社会コース 中西 三紀

I 本実習の趣旨

本実習は、人文社会科学部の台湾の協定校、私立開南大学（桃園市）主催「2019年度開南大学夏期中国語／英語・台湾文化研修」（実習期間：2019年8月15日～27日）に参加したものである。この研修の趣旨は、語学能力のブラッシュアップとともに、開南大学の学外において台湾の文化（多様な民族の芸術、宗教、食文化等）を実体験し、また関係する史跡等を参観するところにある。2016年度以来、4回目の参加となる。

II 実習の形態の特徴

- 1 本研修は、姉妹校同士が一对一で行う形をとらず、開南大学が有する多数の日本の国公立の協定校から一校当たり原則3名の学生を募って実施する、いわばインターカレッジ型の研修である。本年度は中国語コースには、本学の他に岡山大学、愛媛大学、静岡大学、宮崎大学、拓殖大学、札幌国際大学等16校計31名が、英語コースには、本学の他に岡山大学、琉球大学、愛媛大学、静岡大学、京都先端科学大学等12校計22名が参加した。本学からは中国語コースに4名、英語コースに1名が参加した。こうした形態の海外語学研修・異文化研修は決して多くなく、研修生は、日本国内ではなかなか計画できない個別大学の壁を越えた学生間交流を台湾で体験する。
- 2 4ページに添付したプログラムからも明らかなように、本研修では1.5時間×20回＝30時間の語学の演習が設定されている。この他にも、半日を使った文化体験が2回、日帰りの研修旅行が2回計画されている。日本の協定校からは事前に学生の中国語能力・学修時間等について通知してあり、研修生は、レベルを分けた2つのクラス（1つは中国語学習4ヶ月程度も可。いま1つは基礎を修了した者向け）いずれかに入って学習する。今年度も吉尾は授業を見学し、両クラスとも日本語は一切使わず、密度の濃さが印象的であった。学習成果は、数名のチームを作って行われる最終日の発表会で披露される。
- 3 研修期間中、大方午前は学内で語学の演習が行われる。そのうえに、午後の時間の3分の2以上が学外の文化体験、旅行および「自由時間」に充てられる。特に注目されるのは「自由時間」である。日本語を学ぶ学部生（応用日本語学科）や大学院生がチューターとなり（本

年度計10名)、授業中のサポートのみならず、この「自由活動」に随行する。具体的には、1名のチューターが数名の日本人研修生を引率し、午後1時頃から夜宿舎に戻るまで学生の希望に沿って台北市内の参観等に同行する。チューターは事前に開南大学の教員から十分な指導を受け、また活動の現場でも綿密に連絡をとって引率する。日本人学生が所属大学の枠の越えてこの研修に参加するだけに、チューターの苦労は大きい、そのリーダーシップは目を見張るものがある。逆に研修生はかかるチューターの活動を通して台湾の大学生の姿や、大学間国際交流の意義等を実感しているように感じられる。また、こうした交流を通して、参加学生たちは「国際交流」の大切さ、また文化・言語が異なる者において何をすることが交流なのかを身をもって経験したといえよう。

Ⅲ 本研修参加の成果と「海外実習」の中での位置づけ

2016年度この研修に参加した学生は、翌年2月に台湾の別の大学に留学した。17年度の本研修に参加した学生は18年度開南大学に正規に留学した(半年間)。そして、19年度に本研修に参加した学生も、開南大学を含めて中国語圏の大学に留学することを希望しその準備を進めたのだが、2020年初からの新型コロナウイルスの感染拡大にともない、留学を断念せざるをえなくなってしまった。前年度の報告書に書いたことをあえて繰り返すが、開南大学で毎年夏季に実施されるこの中国語／英語・異文化研修は、本学人文社会科学部の「海外実習」において、学生が段階的に学習しスキルアップを図る豊富な材料を提供する——その意味で良き入門的授業の1つであると考えられる。

プログラム

○食事付き

	09:00-10:30 10:40-12:10	13:00-14:30 14:40-16:10	備 考	朝 食	昼 食	夕 食
0815 TH	到着	開会式・歓迎会 / 中国語 / 英語①②	タクシー 空港→大学学生寮		○	
0816 FR	中国語 / 英語③④	文化体験 1 霞海城隍廟参拝・縁結び 祈願体験、西門町散策	専用バス 大学—霞海城隍廟・ 西門町		○	
0817 SA	中国語 / 英語⑤⑥	自由時間（台湾人学生と の交流等）				
0818 SU	中国語 / 英語⑦⑧	自由時間（台湾人学生と の交流等）				
0819 MO	宜蘭濱海拉拉車（サイクリングコース）→ 宜蘭餅（牛舌餅）作り体験→昼食→国立伝 統芸術センター見学		専用バス 大学—宜蘭		○	
0820 WE	中国語 / 英語⑨⑩	半日ツアー 台北 101 展望台、故宮博 物院見学	専用バス 大学—台北		○	
0821 WE	中国語 / 英語⑨⑩	文化体験 2 パイナップルケーキ作り 体験、淡水老街散策	専用バス 大学—郭元益糕餅 博物館・淡水老街		○	
0822 TH	十分老街→天燈上げ体験→海悦樓（昼食） →九份老街		専用バス 大学—九份・十分		○	
0823 FR	中国語 / 英語⑪⑫	自由時間（台湾人学生と の交流等）				
0824 SA	自由時間（台湾人学生との交流等）					
0825 SU	中国語 / 英語⑬⑭	発表準備				
0826 MO	中国語 / 英語⑰⑱	中国語 / 英語⑲⑳ 成果発表 / 修了式	帰国準備		○	
0827 TU	帰国	帰国	タクシー 大学→空港			

開南大学夏期研修を終えて

人文社会科学部人文科学コース
長田 広子

8月15日から26日の約2週間にわたり、開南大学で行われた夏期研修を終えた感想、研修内容を述べていく。

まず研修中の授業内容について述べていく。2週間あった授業で私は前半の方の授業内容について説明する。

私は華語の初級クラスに参加した。授業の初日これから使っていくプリントが配られた。プリントには発音の基礎である四声やピンイン、会話文や単語が記されていた。基本的に授業の流れはプリントに書いていることを先生が読んで、それを生徒が復唱していくものであった。そして教室にいるチューターに一人ひとり発音を確認してもらうという流れだった。初回の授業内容は基礎となるピンインを習う。声調や短母音を練習し、声調組み合わせ表を見ながら発音練習をした。次に子音を習い無気音・有気音・舌歯音・巻舌音などの練習、複母音の組み合わせなどを繰り返し読み練習する。その後は「おはよう」や「こんにちは」などの基本的な挨拶を習った。2回目は授業に関係する用語、地名や場所の名前を読んでいった。3回目は既存の自己紹介文を読み次にその文章を自分に当てはめ、次の授業で発表するために練習をした。4回目に皆の前で自己紹介を行い、終わると次の日に行く宜蘭について書いてある会話文をペアになり練習する。以上が前半の授業内容である。

台湾での研修や開南大学のチューターの学生、他の日本人学生と交流し私が感じたことを述べていく。私は海外へ行くこと自体が初めてで、台湾がどのような環境で、どのような生活をしているのかほとんど知らなかった。しかし研修を通し様々な場所に行き、台湾がどのような国なのか、良い部分もあまり良くないと感じた部分もそれぞれ知ることができた。夜市など行くと、日本語で話しかけてきたりする人がいたり、商店では日本にちなんだグッズがあったりコンビニエンスストアや薬局には日本製の化粧品やお菓子など置いてあったり、台湾と日本の関係が近いということがよくわかった。そして日本との大きな違いとして、買い物袋が挙げられる。基本的に台湾はどこのお店に行っても袋がつかない。必ず「袋は要りますか」と聞かれ、必要ならば袋代を払う。大きな店でもつかないため、袋を持ち歩かないといけなかった。日本でも環境保全のため最近袋が有料な店が増えているがまだまだ根付いていない。台湾では袋が無いことが当たり前になっている、とても大きな違いだと感じた。

2週間お世話になったチューターである開南大学の学生はとても日本語が上手で、不自由なく会話することができた。日本語が専攻とはいえここまで上手に話せるのは凄いと思ったし、他言語を話せるということは本当に素敵なことだと感じた。課題が出たときは夜につきっきりで発音を教えてもらったり、自分たちが行きたい所に連れて行ってくれたり、行った先々で通訳や注文、電車などの乗り方を教えてもらったりと様々なサポートをしてくれた。日本の歌や俳優、漫画やアニメにも詳しく日本語歌詞で歌が歌えていて日本語のレベルが高かった。

また、他の日本人学生とも交流し、海外経験が豊富な学生や中国語を専攻している学生、中には自分の親と同年代位の学生もいた。中国語、英語を話せる学生を見て、何か一つでも他の言語を話せたら、自身の世界は広がるんだと思った。実際地元の人と対面した時、私は中国語が分からないため、挨拶程度しかできず言葉の壁にとっても歯がゆさを感じた。そしてこの歯がゆさから、何か一つでも外国語の勉強を頑張ろうと思えた。

私は今回の台湾研修を通し今後の大学生活で、もっと海外に目を向けようと思った。外国の歴史を学ぶことは好きだったが、現在についてはニュースなどで入ってくる情報しか知らない。しかしインターネットを使えば簡単に調べることができる。グローバル化が進む中、他国の文化を知るということはとても大切で、そのようなことが自由にできるのは大学生時代だけなのではないかと思う。書籍や資料を見たり実際現地へ行ってみる、仲良くなった台湾の学生に聞いてみるなど方法はたくさんある。外国をイメージだけで終わらせず、実際赴き見て知ることによって自身の見識が広められ、物事を考えるときの視点を増やすことができる。

以上が私の開南大学夏期研修での体験、感想である。

国際社会実習に参加して

人文社会科学部人文科学コース

多田 理沙

1. はじめに

8月15日から8月27日の約2週間にわたり、台湾の開南大学において夏期華語および英語・台湾文化研修が行われた。本研修は、語学研修、台湾文化研修、学外日帰り研修によって構成されており、加えて、自由時間には開南大学のチューターや日本の他大学の学生と交流を図った。本稿では、上記の研修についての感想を述べる。

2. 授業

中国語初級クラス、とりわけ、中盤から成果発表の練習にはいるまでの授業について述べる。前半の授業では、発音から始まりピンインや声調といった基礎を学んだが、中盤の授業では、長文を用いた授業を行った。しかし、長文を読み解くといった授業ではなく会話形式のものであった。用いた長文は、本研修で訪れる場所や文化体験に即した内容であり、実践的であった。また、担当の教員の方は日本の大学での指導経験があり、非常に日本人にとってわかりやすい説明であった。そのため、チューターに気軽に質問できる環境ではあったが、授業内で質問する機会はあまりなかった。

長文の文法は中国語を勉強していないと分からないものもあったが、全体としては、中国語に触れたことのない人でも参加できるものになっていると感じた。

3. 文化体験・交流

2週間の滞在で多くの日本との違いを感じ、台湾について理解することができた。その中でもとりわけ感じたのは食事である。味付けや郷土料理は台湾独自のものであり、日本の味付けとは異なっているものが多かった。とりわけ、お茶の甘さや肉料理のときに感じる香辛料のようなものは好みに分かれるだろうと思う。また、全体的に小麦粉を主とする炭水化物や油を使ったものが多く、野菜の料理は少なかったように感じた。さらに、スーパーやコンビニでは牛乳や牛乳ベースの飲料、ヨーグルトといった乳製品の種類が豊富であった。豆乳のイメージが強かったため非常に意外に感じた。

総じて、台湾独自のもの、中華料理、日本から影響を受けているものとさまざまであり、食事から台湾文化の形成の過程を考えさせられた。

4. まとめ

本研修は、筆者にとって初めての海外経験であった。加えて、中国語も大学から始めたため、自信がなく、研修が始まる前は不安であった。しかしながら、先生方、研修に参加するメンバー、他大学の学生、そして現地の方々のおかげで有意義な研修にすることができた。研修で得た多くの経験や交流から多様な視点で考えられるようになったと感じる。

特に、今後の学問についての考え方が変わった。筆者は日本や日本の歴史について興味があり、大学では日本という自国についてだけを学ぼうと考えていた。しかし、自国を考えるためには他国の視点も必要であり、同じ物事でも別の立場から考えていかなければ深い理解にはつながらないということを学んだ。そこから、他国から見た日本史、つまり、他国の世界史という学問への興味をもつことができた。

また、中国語自体にもさらに面白みを感じ、中国語の能力の向上だけでなく、台湾についてより深く学びたいと感じた。

我々は、いくら知識を増やしても日本人であり、外国人にはなることはできない。しかしながら、自国の視点で自国を考えることと等しく、日本人の視点で外国を考えることは非常にやりがいがあり、重要であると考えている。今後も、台湾をはじめ、世界について学び、その一つとして外国語の能力を高める努力を続けようと思う。

台湾での2週間を振り返って

医学部医学科

原田 美希

1. 参加した動機

私が参加した理由は、単純に海外に行ってみたかったからだ。海外ならどこでもよかった。説明会に参加し、このプログラムに参加するかどうか悩んでいたが、吉尾先生の「1年生のうちに行っていておいた方がいいよ」という言葉にも若干乗せられて、また期間が2週間と比較的長く、プログラムに授業も含まれていたため、参加することを決めた。

2. 授業および台湾文化研修の内容と感想

この研修では、中国語か英語の授業を受けることになっている。私は、初めは英語の上級クラスの授業を受けていた。しかし、その授業のレベルが低いと感じたのと、台湾に来て生の中国語にふれているうちに中国語を勉強したいと思うようになったために、途中で中国語初級クラスに変更した。(英語の上級クラスについて、レベル的には中学校1年生レベルだと私は感じた。) 授業について、私からは中国語初級クラスの成果発表会について書こうと思う。

成果発表会では、3グループに分かれ、そのうち2つのグループは中国語の歌を歌い、残りの1グループは寸劇をした。私たちのグループは寸劇をしたため、それについて述べる。

私たちは少しアレンジがかかったシンデレラをした。準備段階では、チューターの方が題材を決め、原稿も準備してくれた。練習段階では、まず個人で振り当てられた役のセリフを覚え、次に皆でセリフ合わせをした。授業時間内にも、セリフ合わせをする時間はとってもらえたが、同じグループのメンバーが提案してくれたこともあって、私たちは授業以外でも練習した。セリフについて、初学者の私にはやはり発音がとてもネックだったが、チューターの方に聞けば(というか聞かなくてもロビーで私が発音の練習をしているだけで)とても親切に、何度も何度も発音を聞かせてくださったので、何とか乗り切ることができた。チューターの方は本当にとても親切で、中国語の勉強面でもとてもお世話になった。また、発表に関しては先生もとても乗り気で、いろいろと発音や演出のアドバイスをしてくださった。

本番は、チューターの方が中国語の字幕を作ったり、BGMをかけたりしてくれたおかげもあり、充実した発表になったと思う。

3. 研修期間に感じたことや考えたこと

正直な感想は、「思っていたより台湾と日本の文化は変わらない」というところだったが、今回は「台湾文化研修」ということだったので、ここでは生の台湾の環境や人々にふれて感じたことを書く。

まず、台湾の人々は日本人に比べ、人との距離感が近いということだ。それを特に感じたのは、台湾人の店員さんや、開南大学のチューターさんとのやり取りの中だった。前者に関しては、商品を見ているだけで、笑顔で話しかけられることが多かった。そんなことをされるとつい買ってしまうようになるので注意が必要だった。また、このように精神的な距離が近いからか、物理的にもすごく近づかれたこともあって驚いた。後者に関しては、先述したが、私が一人で勉強していても「教えようか？」と躊躇なく話しかけてくれたり、ロビーでやっていたUNOにさらりと誘ってくれたりした。この距離感が、私には驚きでもあり、心地よくもあり、少しくすぐったくもあった。(これらのことを私自身が感じる事ができたのは、台湾が親日国でありかつ私が日本人だったからかもしれない。)

また、スピード感がとにかく早いな、と感じた。夜市や料理店では、食べ物がすぐに出てくる、バスは人が乗った直後すぐに発車し、タクシーは車と車の間を縫って少しでも前へ行こうとしていた。とても怖かった。

また、トイレ、水道などのインフラも日本とは様子が異なっていた。台湾では日本人が水道水をうかつに飲むのは危険である。またトイレにはトイレットペーパーが設置されていない。ただ、これによって「台湾は遅れている」とするのか、「文化間の衛生観の違い」と捉えるのは難しいところだとも思った。台湾人から見れば、日本は過剰に衛生に気を配っているとうつるかもしれない。単純に「発展途上だ」というのも容易だが、今の状態を、その国の文化として受け入れることも必要だと思った。

環境への配慮は、台湾は先進的だと感じた。台湾ではプラスチック製レジ袋は有料で、ストローは紙製であった。日本貿易振興機構によると、2002年からプラ製レジ袋の規制が始まっており、2030年までにプラ製レジ袋、使い捨てプラ製食器・コップ・ストローが全面的に使用禁止とすることが目指されているらしい(注1)。この点は日本も見習うべきだと感じた。

4. チューターや他大学の日本人学生との交流について

チューターさんはとても親切な対応をしてくださり、感謝が絶えない。もし私が逆の立場であっても、彼女たちのようににはできなかつたらと思う。彼女たちのおかげで、ちょっとしたゲームやスポーツを通して交流を深めることができ、私は約2週間、台湾で大きな不安や孤独を感じる事がなく過ごすことができた。彼女たちが日本に来たときは、私も同じようにおもてなしをしたいと思う。

また、普段関わらない大学や学部の方と話すことができ、いろいろな価値観にふれることができた。

ただ、全体を通して、チューターさん含め台湾人の方との交流よりも日本人学生との交流の機会のほうが多かったと思う。プログラムに参加している日本人の方が圧倒的に多かったのもあるが、私からチューターさんや現地の方に話しかけるのを躊躇してしまったせいもあると思う。自分から機会をつくらないと話すチャンスは来ないので、今後またこのような機会があったら、少し勇気を出して活発に交流したいと思う。

5. この研修と今後の高知大学での学生生活について

この研修に参加したことで劇的に何かが変わったというような実感はないけれど、日常の当たり前だと思っていることを、台湾での経験を踏まえて観察すると、問題点に気づくことができると思う。現時点での日本の環境への配慮についての問題意識の薄さも、台湾に行ったからこそ気づけた問題点の一つだ。台湾でこのような取り組みが行われているということを、書籍などで知ることはできるが、やはりその地で人との関わりの中で体験したほうが、記憶に色濃く残るだろう。そしてこのような体験は、私の今後のものの見方に様々な良い影響を与えてくれると思う。

(注1) 日本貿易振興機構（ジェトロ）海外調査部中国北アジア課アドバイザー・嶋亜弥子「台湾で脱プラスチックの動きが加速」、2019年6月5日 <https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/2019/01dee602c9571856.html> (2019年10月7日閲覧)。

2019 年度開南大学夏季 中国語／英語・台湾文化研修中国語中級クラスに参加して

人文社会科学部国際社会コース

岩崎 美来

1. はじめに

本レポートは 2019 年度開南大学夏季研修の、中国語中級クラスの授業内容と、その感想を報告することを目的とする。

2. 授業内容

授業は各大学から集まった日本人と、数人のチューターが生徒として集められる。先生は台湾人で、基本は中国語、必要に応じて英語で進められる。チューターは、日本語の話せない先生の代わりに生徒を日本語でサポートしてくれる。日本人の中には、中国語を学習したことのない生徒もいたが、チューターのサポートの下、最後まで授業を受けきることができていた。

基本的に日常会話が学習の内容で、中級と^{いえど}も授業内ではかなり初歩的な学習を行うことがあるため、簡単な部分、難しい部分の格差は否めない。初歩的な部分の例としては、漢字の練習である。授業は繁体字で進められるため、日本人にとってなじみのない字が出てくることもあるが、明らかに私たちが日常で使う漢字（漢数字など）の書き取りの時間が設けられたときはもったいないと感ぜざるを得なかった。その他の日常会話練習は参考になるものが大変多く、大学外で実際に使うことができ、身についたことが実感できた。たまに出る、文化体験の報告発表の課題は少々困難かもしれないが、学生寮でのチューターとの時間に、丁寧に教えてもらえて特に問題はなかった。中級クラスで授業を受ける中で、個人的に学習しておいて便利だと思ったのは発音である。台湾人は特殊な発音記号を用い、アルファベット表記に関して不慣れなようであった。先生はアルファベットのピンインで授業を進めてくれるが、ごくまれに間違えることがあった。チューターに聞くときも発音に関してはピンインを聞くことができない。著者自身はある程度のピンインの知識があり、聞いた発音をピンイン表記に直すことができたので、その点は非常に便利であった。また、英語もある程度理解できたので、先生、生徒間のやり取りの中では積極的に意見を挟み込めたし、そこで心に余裕が出てくると、中国語で質問をする余裕も出てきた。よって最終結果発表の際は、重要な役を任せてもらえたが、これは担当してもらう先生によってかなり差が出てくる部分だと考えられる。今回の中級クラスの先生は非常に最終成果発表に対して意欲的で、生徒に任せる、というよりも自ら采配を決め、完成度の高い作品を作り上げることにこだわりを持った様子だったため、授業内容から鑑みればレベルの高い中国語で話さなければならなかった。ただ、その分の評価はプラスに考慮してきていたし、達成感も大きかった。

3. 総括と感想

今回の台湾研修での授業は一言で言ってしまえば自分の意欲次第で大きな差が出るものであった。中国語ができても、できなくても、積極性や向上心はそこに左右されることは少なく、デバイスの利用やチューターのサポート下では中国語能力で得られるものに差が出ることは考えにくい。ここまで授業内容について様々に述べてきたが、日常会話を想定した、基本的な、楽しい学習が軸となっており、教室では笑いが起こることもよくあった。時には先生が台湾特有の果物やお茶をふるまってくれることもあり、台湾文化を教室の中でも感じる事ができた。チューターのサポートは非常に手厚く、仲良くなると家族のように接してくれ、今でも連絡を取り合っている。余談ではあるが、筆者は今回の研修の目標として、現地にしかない物を食すことを掲げていたので、日本人がなじみにくいものを積極的に食べていると、チューターなど現地の人から非常に好感を持ってもらえて、一種の多文化理解を感じた。個人的には、今回の台湾研修は非常に実のあるものだったと感じている。

台湾という地で

人文社会科学部社会科学コース

井上 禎隆

私は2019年8月14日から8月27日までの2週間、台湾桃園市にある開南大学で「台湾文化研修」という文化体験をした。英語クラス・中国語クラスがあり、午前中は言語学習を行い、午後からは文化研修であった。私は英語Bクラスで午前9時から正午までの3時間授業があった。先生はアメリカンネイティブスピーカーで、人数は15人程度、自分を含めてメンバーの多くは聞き取れるが話せない、文法がよくわからないという学生がいた。

授業では発音（Pronunciation）や学習した文法や表現を使った自由作文、各グループワークで英語を使って話す（Speaking）ことや最終発表の準備等であった。基本的に1時間目はリフレッシュタイムといって3人～4人グループで昨日の出来事や今日やることなどを互いに話し合いをした。脳がまだ起きていない状態で英語を使用し、英語を使用する習慣づくりの一つであった。2時間目は動画でネイティブスピーカーの口元を見ながら、細かな発音の違いを再度確認し、自分の発音がアメリカンイングリッシュに近づくことができるように、先生が直接丁寧に教えてくれた。（r/l）の違いはもちろん、（th）や（t）（d）の違いなど、できているようできていない部分を少しずつ修正していく学習方法であった。また、授業のたびに、最低でも一つの文法や表現を学習するため、その文法や表現を使い短文を作成し、先生が添削するという方法もあった。3時間目は最終発表の準備時間として、クラスのメンバーやグループに分かれて各自英語を使った劇をするのか、歌をするのかなど話し合い等の自由時間であった。発表することが決まるとその練習時間としていた。

文化研修では現地の開南大学のチューター（学生）が常に日本語でサポートをしてくれて、台北を中心とした観光地を訪れた。日本でも有名な九份や十分、東側にある宜蘭にも行くことができ、通常のツアーや旅行ではこれだけの多くの地に行くことはできなかったと思う。牛舌餅やパイナップルケーキの手作り体験も行った。また、文化研修がない日もあるため、その日は自分が行きたい場所に自由に行くことができる。ここでもまた、どう行くか、バスや電車の使用方法を丁寧に説明してくれるチューターの方々ののおかげで日本人学生は楽しく充実した台湾生活を過ごすことができたのではないかと思う。特に思い出になった出来事がある。自由時間を使って私は一人で桃園の端にある康莊蓮園という蓮の名所へ観光することにした。もちろん、公共交通機関を使用したのだが、英語が通じず、中国語での会話は当然不可能な中でとても良い経験となった。車で1時間半かかるところを電車とバスを乗り継ぎ、2時間半以上もかかってしまったが、到着できた時は何とも言えない達成感であった。そこにはとてもきれいな蓮の花が咲いており、人が一人乗ることができる巨大な蓮が池の中で浮いていた。有名な観光地だけでない地方ならではの体験ができたことは私一人だけの思い出である。

今回の文化研修には北は北海道、南は沖縄まで様々な大学の学生がおり、学部も様々、年齢幅も広がった。そこでは、ベトナム出身の学生や韓国の学生、仕事を退職し、再度大学で学生として勉学をされている方もおり、多くの話題で交流ができたと思う。また、アメリカやカナ

ダへの留学経験がある学生、中国語がネイティブレベルの学生など、様々なバックグラウンドを持った学生は自分にとって多くの刺激を受ける良い機会となったのではないかと思う。特に、自分の中でとても良い会話ができたと感じる場面があった。韓国の学生と台湾の学生(チューター)と韓国語や日本語を通して今の日台関係や日韓関係について語り合ったことである。私は昨年韓国へ留学したことにより、韓国語を使用して会話をすることが多少は可能であったため、とても良い時間だった。

私が今回の文化研修に参加したかった理由は二つあった。

一つ目は韓国で留学したからこそ、英語の必要性・重要性に気づいたからこそ学習したかったことである。留学先の大学がキリスト教系の大学であったため、留學生の幅は広く東南アジアはもちろんアフリカ、欧米圏、南アメリカまでと韓国語で触れ合える機会が多数あったのである。しかし、多くの留學生は韓国語で会話することはなく、英語が基本的なコミュニケーションツールであった。私は会話ができるほどの実力はなく、より学習しなければならないと思ったのである。二つ目が、韓国の文化や言語、宗教などに触れてきて、今の日韓関係について深く考えるようになったことである。そこで、歴史的に韓国と同じ境遇であった植民地時代を過ごしてきた台湾が今の日本に対して考えていることを生の声として聴きたかったのである。もちろん、現在生きている我々は植民地時代を生きていない。だからこそ、学ぶ必要があると考えている。私たちは渡航前に台湾の歴史や文化を事前学習として行い、知識や理解を深めた。日本人として日本の歴史や文化は当然、これから行く台湾についても事前知識として知ることが必要であった。

事前学習の中で、疑問に感じたことは国家として日本が台湾を承認していないという事実である。これについては、多くの考えがあるが外務省のホームページには以下のように記述されている。「台湾は我が国にとって、基本的な価値観を共有し、緊密な経済関係と人的往来を有する重要なパートナーであり、大切な友人です。政府としては、台湾との関係を非政府間の実務関係として維持していくとの立場を踏まえ、日台間の協力と交流の更なる深化を図っていく考えです」。日本としては1972年の日中国交正常化によって中華民国政府との国交断絶を余儀なくされ、台湾が成立し、現在の状況となっている。日本と台湾を結ぶ航空会社も多く、民間の往来は旅行だけでなく、留学先や経済的連携も果たされている状況であり、とても重要な隣国として考えても良いのではないかと考えている。現に、日本からの訪台者数は197万人、台湾からの訪日者数は476万人である。この数を見れば友好的な関係があることはわかる。なぜ友好関係があるにもかかわらず、国家承認ができないのか。1960年代は台湾と外交関係を結んでいた国も多かった。しかし、71年に台湾が国連機関から脱退したことや、当時、ニクソン大統領が中国と外交を樹立し、その他の国も台湾ではなく中国と外交を結ぶようになったのである。日本も同じく72年に中国を承認し、台湾と断交したのである。近年台湾との国交があった太平洋の島々の国や南米の国も少しずつ断行する国も増えていることも事実である。

中南米	ニカラグア	大洋州	マーシャル諸島
	ホンジュラス		ナウル
	ベリーズ		ツバル
	グアテマラ		パラオ
	ハイチ	アフリカ	エスワティニ
	セントルシア	欧州	バチカン市国
	パラグアイ		
	セントクリストファー・ネビス		
	セントビンセント・グレナディーン		
	パラグアイ		

(外務省HP 台湾対外関係より著者が作成)

上記の表のとおり、現在では台湾と外交関係がある国は計 15 カ国と減少しており、中国と外交関係を結ぶ国が増加し続けている。そこには政治的な思惑やアメリカの影響などがあったと思うが、私が喚起したいことは大東亜戦争中にいくつかの国を植民地化した日本が第二次世界大戦の終戦後、戦争中の様々な問題に向き合わなかったことが現在になって、浮き彫りになってきた証拠であろう。つまり、言葉では民間レベルでの関係維持の重要性や日本からの経済的支援をいくらやろうが解決にはならないということである。戦争における敗戦国の役割は犯した罪を反省し、謝罪するほかないのではないだろうか。台湾を植民地にしたことに対して、台湾の学生（チューター）はよい植民地化だったと言ってくれた。確かに、2週間程度での関係では心からの発言はできないことは考慮しても、日本の植民地化は欧米諸国の植民地化から救ってくれたという神話が完成していることも日本が甘んじている原因でもある。俗にいう「親日国家」というワードが世間では先行しており、それまでの過去は知らずとも日本を好んでくれる台湾を好きという空虚な日本人心理を構築しているのである。韓国の学生は「韓国には元々存在していた国があり、それを破壊し、日本の習慣や文化の強要や慰安婦などの行為をした」と言った。大日本帝国時代に日本の植民地化をする上で台湾と韓国との間で違いがあったのかを考えるより、日本が植民地化をしたという歴史的事実が存在する限り、日本人として歴史に向き合わなければならないということを再確認した。

私は台湾への訪問は2回目であり、今回のチューターさんだけでなく、台湾の学生とも交流があり、身近にある国の一つだと思っている。2週間という短期間ではあるものの、中国語も英語も流暢にできない自分にとってはどれも新鮮な出来事であり、驚くことや面白いことなど十分に満喫できた研修となった。また、私の台湾研修での目的は半ば達成されたが、後悔する点も多くあった。その一つは私が海外に行った際に大切にしている「現地人になる」ということである。現地人になるというのはその地域に滞在している間その地域の行動様式に染まることや日本との比較をせず、その地域にある習慣などを吸収し、あたかもその地域に住んでいるかのように振る舞うことである。中国語ができず、英語だけではやり過ごせない場面が多く、こ

れもまた良い経験となった。

高知大学の一人として今回の研修に参加できたことに感謝するとともに、台湾の学生(チューター) や吉尾先生、中西先生のサポート等があったことで、ただの旅行として終わらず、中身の詰まった充実した時間を台湾という地で過ごすことができた。これからも台湾への関心を持ち続け、学生間の交流も絶やすことなく、日本と台湾関係の維持の力となれば私の望む国際交流の形になると思う。本当に開南大学の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいである。ありがとうございました。

【参考文献】

外務省 HP より 大臣談話

https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/danwa/page3_001538.html (2019/9/9)

外務省 HP より 台湾

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/taiwan/data.html#section3> (2019/9/30)

川島 真、清水 麗、松田 康博、楊 永明 『日台関係史 1945 - 2008』、東京大学出版会、2009 年。

《国内調査実習》

2019年度 高知県・中芸地域における国際社会実習について

岩佐 光広（高知大学人文社会科学部）

赤池 慎吾（高知大学次世代地域創造センター）

以下の報告は、高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コースの専門科目「国際社会実習（国内調査実習）Ⅱ」および「国際社会実習（スタディ・ツアー）Ⅰ」として、2019年度に高知県安芸郡北川村で実施した実習についての報告である。参加学生による報告に先立って、本実習の概要について手短かに説明しておきたい。

高知県東部に位置する中芸地域（安芸郡奈半利町、田野町、安田町、北川村、馬路村）をフィールドとする国際社会実習は、2017年度より継続して開講しているものである。その共通するテーマは「中芸地域の日本遺産の「サブストーリー」を発掘しよう！」である。2017年4月、中芸地域が申請したストーリー「森林鉄道から日本一のゆずロードへ——ゆずが香り彩る南国土佐・中芸地域の景観と食文化」が日本遺産に認定された。この日本遺産に認定されたストーリーを出発点に、そこでは十分に描かれていない地域住民の個別具体的な経験に根ざした生きられた歴史を「サブストーリー」として位置づけ、それを聞き取るインタビューを実施することが実習の中心的活動となる¹。

本年度の実習でも、これまでの基本的な方針を踏襲し、「地域住民へのライフヒストリー・インタビューを通じて中芸地域のサブストーリーを発掘する」というテーマを設定した。実習地は2018年度に続き北川村とした。この企画のもと、2019年10月31日と11月1日にそれぞれ説明会を行った結果、人文社会科学部の3名の学生（4年生1名、3年生1名、1年生1名）が参加することとなった。

11月から12月にかけて事前学習会を行い、インタビューの基本的なやり方を説明するとともに、実習の細かな打ち合わせを行った。中心的な作業は、昨年度の実習から導入した「台本づくり」である。これは、インタビューの場面を想定しながら質問の項目や順番などをまとめたものを「共同で」作る作業である。この作業を参加者が共同で行うことで、参加者間で互いの興味関心を知るとともに、インタビューの進行のイメージを共有することを目的としている。

中芸地域での実習は、12月20日から21日にかけて、1泊2日の日程で実施した。1日目は、移動と宿泊先で事前の打ち合わせを行った。2日目は、午前と午後の2回、インタビューを実施した。午前中は、北川村の小島集会場において2名の女性にインタビューを実施した。終了後、昼食を取りながら午前中のインタビューの振り返りを行った。午後は、和田集会場に移動し、2名の女性にインタビューを実施した。なおインタビューにご協力いただいた方の年齢は、89歳、88歳、83歳、66歳となっており、いずれも北川村にお住まいである。

1 中芸地域での実習の企画立案の背景や経緯、その後の展開などについては、2017年および2018年度の実習報告〔岩佐・赤池 2018、岩佐・赤池 2019〕で詳しく述べているので、それらを参照いただきたい。

以上の実習の事後学習として、ICレコーダーで録音したインタビュー内容のトランスクリプト（文字起こし）の作業を行った。参加者間で分担して、録音したすべてのインタビューのトランスクリプトを行った。そのうえで、インタビューで語られた内容をインタビュー어의語り口をいかしながらまとめたレポートを執筆した。

以上、簡単ではあるが、本実習の概要について説明してきた。以下には、上述した実習に参加した1名の学生のレポートを掲載している（他の2名については、体調不良等の諸事情によりレポートの執筆は残念ながらできなかった）。学生たちがこの実習を通じてなにを感じ考えたのか、ぜひ一読いただければと思う。

最後に、本実習に関わる諸経費は、高知大学令和元年度中芸のゆずと森林鉄道日本遺産協議会受託研究「研究者と地域住民の協働による日本遺産サブストーリー調査研究」による。実習の実施においては、北川村からさまざまなサポートを頂いた。また、中芸のゆずと森林鉄道日本遺産協議会をはじめとする中芸地域の各組織にも助力いただいた。そしてなにより、インタビューを受けていただいたみなさんのご協力、参加学生のみなさんの頑張りがあっての本実習であり本報告である。みなさんに記して謝意を申し上げたい。

参考文献

- 岩佐光広・赤池慎吾 2018 「「国際社会実習（スタディ・ツアー）」および「国際社会実習（国内調査実習）」について」『2017年度 国際社会実習報告書』、高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科／高知大学人文社会科学部国際社会コース（編）、pp.76-80、高知大学人文社会科学部国際社会コース。
- 2019 「2018年度 高知県・中芸地域における国際社会実習について」『2018年度 国際社会実習報告書』、高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科／高知大学人文社会科学部国際社会コース（編）、pp.45-50、高知大学人文社会科学部国際社会コース。

ユーモアあふれる元気澁刺なおばあちゃん —— Mさんのライフヒストリー ——

人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース・1年

川田 南歩

Mさんは、昭和28年（1953年）4月14日に高知県高知市弥生町に生まれる。現在66歳。23歳で結婚してから、高知県安芸郡北川村に移住。現在は旦那さんと2人で北川村に住む。

■Mさんのわんぱく時代——少期

幼いころね。もう何十年も前の話だからね。覚えているかね？小学校は高知市内の昭和小学校に通ってたね。1人で歩いて通学していました。学校から家まではわりと近かったと思う。十分もかかってないくらい。休憩時間に忘れ物取れるくらいやったね。実際に体操着とか取りに行ったこともあったね。

姉とはあんまりね、六つ離れているんでね、小学校上がったら、姉は中学校なんで。で中学校はもう自転車で行くんで。一緒には学校に通わなかったね。兄は四つ違いかな。だけんど、四つ違ったら、女同士だったらもっとね、あれだけど。兄とはあんまり。なんか、よくお菓子の取り合いのケンカはしたけどね。「数がこっちの方が多い」って私が言うていって、で結局は、親は下をかばう。そう、で私の勝ち！ってね。

私、わりと強いんよ。あまえんぼで強い。兄はまたほら、女、女で囲まれちゅうき。ちょっと気が弱い。姉にはやられ、妹にはやられ。サンドウィッチね。姉とはあんまりけんかしなかったねえ。姉はほら六つ違うき、全然考えが違ってくるし。そんで、姉とは、家の中で会わないことはないけど、勉強も違うしね。クラブをしおったら遅いし。私も学校で暗くなるまで遊んでくる方なんで。帰ってきたらもう宿題だけもうやっと思いな。

よく暗くなるまで学校で遊んでいたね。学校に入り浸ってたね。結構友達が多かったんで、缶蹴りとか鉄棒とかね。割と活発にね、体力だけはあったね。遊ぶときは近所の男の子とか年下の子もおるしね、クラスメートもおったしね、わりと大将だよ私。もう、「ついてこい」、「年下の子、ちょっとこい」みたいな、そんな感じで走くりまわってました。あと、缶蹴りとか鬼ごっことか、あと、木のところ、こうやって当てて、だるまさんが転んだとか。そういう遊びはしましたね。

1回怒られたことは、ちょっと暗くなりすぎて、時計持っていないくて、やっぱり親は心配するね、しかられて、「よそに電気ついたら早く帰ってこなかん」って。電気がほらもう目安というか。時計持っていなかったからね。

結構遊びほうけて。鉄棒、さかあがりとか運動大好きで。一番体育の授業だけ大好きで、普通のは成績よくないけど体育と音楽と、そんなん好きですよ。もうこっち、勉強は姉に任せる！みたいな。

あと、父親とキャッチボールをしたのは覚えている。お父さんとキャッチボールをするときは私とお父さんだけね、独り占めやったね。私が活発で、姉、兄はあんまりやから、私かわい

がってもらったねえ。で父親に私、男やったらねいうてと言われたことは覚えちゅう。

■旦那さんとの出会い

主人が高知市内で働いていたんですよ。それで、上町のね2丁目やったかな？ お酒のおろし屋さんがあったの、その社内で知り合って。私が事務で働いていて、主人が配達員というかそこのおろし持っていく人でね。ビールケースとか担いで、2トンのトラックに積んで小売りの店に持って行ってたね。18の時に高校卒業してそこへ行きましたね。そんでね、主人が百姓だって知らなかったねえ、こっちにおるき、市内の人だと勝手に思い込んだ。

手鍋提げて、よう一緒に飲みに行ったりねえ。まあ、割とそんな感じで。なんでいいなって思ったかというとな、まあ仕事は真面目にするし、で、まあお酒飲んだらやけどね、面白いんですよ。結構面白いこと言ったりとかね。

で、社内でよくあのレクリエーションとかそんなあってね、ソフトボール大会みたいなのがあったんよ。ピッチャーやっとな。自分が体育会系だからもう余計、いやもうかっこいい。で、おもしろいしね。でどっちかというとな私から押していったかもわからん。

でも、お付き合いしましょうみたいな、かしこまったことはないねえ。2人で出掛けたりもあんまりなかったしねえ。よう飲みに行ったり、まあ他の友達も一緒にね、飲みに行くこともよくあったよ。

■結婚してからの生活——営林署での生活

会社辞めたの、主人の方がちょっと早かったんじゃないかな？ 何カ月か早かった。その時、営林署で働いとったけど、土日にもまたこっちきてくれて、一緒に飲みに行ったり。

主人が営林署で働き始めたきっかけはね、親戚に営林署いきおる人がおって。その人のすすめで、やっぱ跡取りやき、こっち帰ってきてみたいなのがあったんやと思います。あの頃は、営林署も結構人がおったきね、今はもうだいぶ、人員整理というかな少なくなったけどね。営林署の官舎で暮らしておりました。

官舎の人は結構おりましたよ。仕事のあれで官舎が分かれとって、だいたい夫婦2人。あそこも不便なところ、買い物と言ったら、農協が一つあって。こじんまりとはしとるけどね。農協まで行くのにちょっと距離がある。車で行かんと。ちょっと離れとるでね。そんで、土日に帰った時、奈半利まで積んでってもらって。ちょっと買いだめして、みたいな。

で、営林署はねえ、お酒を飲む。もうなんかあったら酒。口実つけて酒。隣同士で一升瓶もってきてみたいにおうちで飲む。よく飲む、ほんとに。主人はぼっかり連れてきてよね。「あてがないか？」って、酒飲む肴ね。なんかっていったって買い物もようせん。「干物があるき」って言ったら、「それでええ」「はいはいええ」みたいな。突如来るきね。ある程度、ほら明日連れてくるとか何日に連れてくるとかね、心づもりができるけどね。ほんと酒飲む。びっくりするくらい。

仕事はねえ、営林署の関係で友達の人、内職やってたんで、ちょっと手伝わせてもらって。

馬路にね、ニチフという会社があったと思うんだけど、今はないですけどね。電気、端子っていうの？　なんか機械もあってね、プラスチックみたいなやつ、金のやつが入ったり、ビンの形したプラスチックはめたりとか。あと、やなせに縫製工場があって、下着ね、縫ったら糸がでるやないですか。あれを切ったり。1枚何ぼ50枚やったか100枚やったか。もう家いっぱいになるぐらい。その内職を紹介してもらった人はやなせの人なんで、そこのご主人とうちら、鉄砲仲間、いのししを取りに行った大将やったもんで、そんな関係もあって、仲良くさせてもらってね。

私の主人は若手ですね。何年かしてからその中川の事務所が、あの最初はその魚梁瀬からどっかあったみたいなんですけど、手前のあの明善のところから、中川事務所に移ってきたもんで中川ちょっと若い人がおったかな？　その人たちが、よう飲みいきいやって誘ってくれて。行きました。最初はもう、みょうぜんの方はほんとに年寄りばっかやったもんで、で、子どもできたときにそっちだったんで。夜泣きする子だったんで長男。神経ピリピリで。みんな朝早いでしょ。営林署。7時出勤だったんで。おんぶして、で、はんでんじゃないけど着て、もう泣きやんでって、そういう気はつかいましたね。で、はげもできました。それも見えんでしょ。自分で。そのころ新婚じゃき、主人と一緒に風呂はいって、私が髪あらっちゃったら、はげちゅうって。その時はげを発見。

子育てのことを相談する人もいないじゃないですか、その中川の事務所移ってきてからは、あの子供さんいたから。でちょっとあの相談したりとかね、その頃はできたけど、そういうのも大変。

主人はお酒によべたらすぐ寝るきね、あんまり子どもの泣き声聞こえないというか、あんまりタッチしないんで、おしめらを替えたりすることもしないんで。子育ては全部、私がやってたねえ。地元の父母には相談できんしね、今みたいに携帯とかがあればするけどねえ。大変でした。

■お姑さんたちとの生活

姑、私、育った環境も違うんで、言葉もちょっとちがうところにおるんですよ。最初来たとき、土日に帰るやないですか。若いから朝は当然眠たいし、年寄りは、はやいんですよ、「はよおきんか？」みたいな感じで、下から起こされるし、「えーここ何か？　外国？」って思ってたね。それで、なんか自分のこと、あてがとかね、うまのこども、うまんねとかね、そういう言葉、使わなかった。主人の父親、母親は大正生まれです。もう一代上がおって。もう明治生まれの、ひいばあ、いちばん上はもっとねえ、優しくて。で姑は女の人やけど、あの仕事がえらいがですよ。バリバリで。なんかねえ、あんまりこども、こども好きやないかな。ひいばあさんのほうがもっとみてくれた。

で、主人の父親が早くに亡くなって60いくつやったかな、昭和の61年に亡くなってそれをきっかけに、もうほら女2人になるんで、年寄りが、百姓するものもないんで帰ろうということになって。百姓したことがないというのがね、ほんとに大変。畑仕事するときに困ったことね、食事が一番困った。行ったら一緒についていくじゃないですか。お昼になったら、家にもよる

んですけど、他の家に聞いたら食事の嫁さんだけ帰ってくることをするんですけど、うち同じように働いて、おなじように帰ってきて、「はい、ご飯」って。そんな感じはありましたよ。で食べて、食べて済んだらもうずっと姑、身体休めるんですよ。こっちゃんが洗い物するんですよ。1時になったら「はい行くで」って、「えっ」みたいな。食事が大変だった。柚子のときもそう。お米の時そう。一緒に行って働いて、さあ飯、ていう感じで、材料も当然ないしね。その当時のごはんは主に野菜。自分の所で作るカボチャとか大根とか野菜。春はまあイタドリ。まあ、食べたことない。高知市内では食べない食べない。しょっぱなから「イタドリ、はい、炊いちょき」って言われて、イタドリ炊いたことないし、「えっ、普通に？」という感じよね。で、もう普通に水としょうゆとか砂糖とかもうやってしたら、「いたどりは砂糖ら入れんで」って。「それ先にゆうて」って。「普通に」って言うきね、で食べたこともないしね。いまだにそれがもう頭にあるき、イタドリやっていうたら無理って。どっかおきゃくがあっても、イタドリでも出そうかみたいななったら私いかん、無理って。グサツときとるき。

明治生まれのばあさんはあんまり口は言わないね、いっつもニコニコしてね、結構ほんわりとされた方。八十幾つまで自分で田んぼのあぜをぬってやってたからね。姑さんはバリバリ外で働くのが好きだった。それでね、姑さんがね結構ね、おかずの好き嫌いがあるき。ケチャップだめ、マヨネーズだめ、カレーがだめ。煮物ばかり食べる。主人の父親はカレーが大好きで。土日に帰った時は私に「町子、カレー」ってよね。姑のは別のを作らないかんし。明治生まれの人は割とマヨネーズもケチャップも食べとったかな。

それで、同じ百姓だったら、ある程度、段取りがわかるじゃないですか。けど習いもってせなかん。おかずもせなかん。それが大変だったかな。けど前はもっと同じ田んぼつくるのも、ほら牛をこうてやりおったみたいなんで、そんなん思ったら、楽だね。

■お化粧

23より前の時とか、お洋服とかお化粧とかこだわっていたことがあるとかは、あんまりなかったねえ。でもその頃は、お化粧をして事務の仕事をしていたよ。高校出るときに化粧品のセールスみたいなのがきて、その時はねカネボウさんと、資生堂さん2社がきてくれて、売り込みみたいなのでね。「一般的なのは資生堂です」って言われてカネボウはなんか特徴があって、で、無難に資生堂。そこでは買わずに、あとから行って買ったと思ったけど。

村では、周りがもう年配ばっかであんまり化粧してないがですよ。もうこっちは若い人もいないし、20歳ぐらいまではやってたかな。で、長男がいくつやったかな？ 3歳ぐらいかな？ こうやって化粧しとったら、「母ちゃんどっか行くんか？」「どっこもいかんで」って。子どものその一言で、そっからもう徐々にやめていって。おでかけするかと思って、捨てられるかと思ったんかな？ かなしそうな顔をしていましたね。

【感想】

自分は今回の実習で、初めて中芸の北川村に足を運び、初めてライフヒストリーの聞き取りをしました。Mさんはお話をしながら、よく「ハハハハハ」とか「ヒヒヒヒヒヒ」とか、とにかくたくさん笑う方で、お話を伺っていて、とても楽しかったです。そしてMさんは、当時の情景をパッと思い描くことができるくらい、いきいきと語っていらして、聞いている私は、どんどんMさんワールドに引き込まれていきました。今までほとんど人の人生について踏み込んでお話を伺うことがなかったので、とても新鮮な経験でした。Mさんが幼いころ、大将で年下の子や同級生を引き連れて学校で遊びまわっていたことをキラキラとした笑顔で語る様子は、まるで当時に戻ったかのようでした。そして、旦那さんとの出会いを伺った際には、「えっそれも話すの？（笑）」と言いつつ、とても大事そうに、いとおしいように話されていました。それとは正反対で、営林署の官舎で暮らしている頃のことを話すときは、当時のことをじっくりと思い出すように話してくださりました。Mさんの「大変」という言葉に込められた、気持ちは、自分は想像するしかないけれど、今みたいに子育ての相談をしたくても、携帯もない、電話も気軽にできない。官舎の中で内職して、ほとんど人との関わりがなかった当時のMさんは、円形脱毛症になるくらいすさまじいストレスを抱えて生きていたんだなと思いました。

今回の実習を通して、自分が経験できない人生を、語りから知ることのおもしろさを感じました。今後、インタビューする機会があれば、もっと自分が経験できない人生の物語を伺いたいなと思います。

高知大学人文社会科学部 人文社会科学科国際社会コース
「2019年度 国際社会実習報告書」

2021年3月 発行

編集・発行 高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科
高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース
〒780-8520 高知市曙町 2-5-1
TEL 088-844-8425
FAX 088-844-8249
<http://jinbun.cc.kochi-u.ac.jp/kokusai/>

印刷・製本 株式会社リーブル
〒780-8040 高知市神田 2126-1
TEL 088-837-1250
FAX 088-837-1251

2019 年度

国際社会実習報告書

台湾 / 中芸